

第21回人文学・社会科学特別委員会における主な意見

(人文学・社会科学の研究成果の可視化について)

- 研究分野によって、国際化の程度が大きく異なると思われる。国内誌が支配し、国際的査読誌への投稿がほとんど行われない分野もあれば、国際的査読誌への投稿が当然視され、支配的な分野もあると感じる。
- 書籍については、まったく研究成果として考慮されない分野もあれば、採用・昇進に鍵となる分野も存在すると考えられる。
- 研究成果の発表方法については、かつてドイツ・フランス語も共存していたが、現在は英語が支配的になっていると思われる。また、若手研究者ほど国際的な活動に関与していると考えられる。
- 研究者に聞いてみると、研究成果を可視化すること自体に違和感はないが、可視化の方法については研究者や研究分野によって大きく考え方が異なると思われる。
- 従来、書籍として一冊にまとめることは研究業績として評価され、就職等に際してメルクマールとなるが多かったと思う。現在、自身の研究成果を書籍として一冊にまとめることに対する評価については、研究に体系性を訴求するかどうかという観点によって評価が分かれ、分野ごとに書籍に対する考え方に違いがあると思われる。
- 研究者コミュニティで支配的な評価軸と指導教員の評価軸の間にギャップがあると、若手研究者のキャリアプランに深刻な問題を与えかねないので、研究者コミュニティとしての評価軸を広く事前に共有する必要があると思う。
- 書籍については、海外では出版社がリスクを取らないようになっており、その点で日本の出版社はまだ友好的であると思う。また、若手研究者はある程度標準化された基準の中で成果を出さないとならない場合、どうしても国際ジャーナルへの投稿が増えると思う。
- 研究成果の社会からの評価といった際に、その研究成果の訴求先がどこに設定されているかによって、評価の在り方は変化すると思われる。また、国際化の際に、単に英語で発信することを国際化と定義することは、一部の分野では間違っており、内容によっては日本語で発信することも重要であると思われる。
- 今年日本語学会では、英文ジャーナルを新しく作ったが、そこには、研究内容を世界に正確に届けたいという観点がある。研究成果を英語で発信しないと内容が正確に海外に伝わらないというジレンマがあり、また、英文ジャーナルを作る取組によって、若手研究者が世界に対する発信力を身に着けることができていると考えている。ただし、日本語学については、日本語での発信もちろん大切ではあるところ、英語での発信と評価をすぐに結びつけるべきではないと思う。
- 研究サマリー等を英語で発信することや英語で研究成果のアウトリーチ活動を行うこ

とは、研究コミュニティの豊かさや厚みの形成のためには意味のあるものであると思う。日本語研究や日本史研究など成果の一部を英語で発信することで、長期的に研究に携わる日本語を母語としない研究者が研究者コミュニティに入るきっかけになるということは、意味があるものだと思う。

- 英語論文の作成が評価のポイントとなるからという理由で研究のクオリティを下げても英語で発信するというところもあると聞くが、長期的にそのような研究リソースの配分が個々の研究者にとって適切なかどうかと、研究コミュニティのリソース配分として適切なのかという観点も議論が必要。また、社会的インパクトの評価についても考えなくてはならないということは多くの研究者の同意するところであるが、社会からの評価は近視眼的になる側面もあるので、どのようにすれば研究成果に対して長期的かつ多様な視点を担保できるのかという課題もある。
- 多様性という観点が世界的に重視されているが、多様性というものは英語でそれらしいことを述べることに留まらないと考えている。単に英語で発信したことだけですべての物事を測るということはむしろ多様化に反するものであると思う。
- 納税者や社会への責任という観点からの評価と、研究者間の資源配分に関するトレードオフの関係という観点からの評価は必要であるという認識の研究者が多いと思う。社会からの評価も重要であるが、研究者コミュニティでの評価等も含めて、評価の多様性をオープンな形で議論することが必要であると思う。そのためにも、評価プロセスはブラックボックスにするのではなく、公に開示して丁寧に議論を行っていく必要があると思う。
- 国際ジャーナル論文に関するデータについては、国際ジャーナル論文を出すことが当たり前で、日本語で論文を書くことは間違っているといったようなメッセージが出ない形で公開してもらいたい。日本語での成果発表を主体として行う研究を過小評価せずに、研究評価と国際発信（すなわち英語での発信）を安易に結びつけず、特に若手が困らないためにも、評価として標準化していけることが重要であると思う。
- 国際化は英語を使うことだけを指すのではなく、文脈によって国際化の評価の仕方は異なると思う。国際ジャーナル論文での発表を絶対視することは違うと思うが、それでは国際化を国際ジャーナル論文以外でどう測るのか考えることが必要。
- いくつかの領域では必ずしも英語の発信だけが国際化ではないものもある。研究としてどのようにそういうものを可視化するのかといった観点が必要になると思う。また、個々のコミュニティの相対化については、異なるコミュニティの人が相互に交流することが必要ではないかと思う。それは簡単なことではないが、異なる価値観に晒されるような機会を得ることが重要ではないかと思う。研究の形は多様であるといっても、分野間で同じ部分と異なる部分を見分けていくことで、それぞれの分野に応じた評価基準を見つけるきっかけになるかと思う。

- テクノロジーの進歩に応じて、研究の形は変わってくると思う。言語的な障壁は翻訳ソフトの登場やその高度化によって現在では小さくなってくると見ることができる。テクノロジーの進歩によって、学術・研究のコラボレーションの仕方がどのように変わっていくべきなのか、この点は長期的に検討が必要。
- 分野毎の評価を考える際には、自身の分野を相対化するという観点から、研究者コミュニティの相互比較が重要であると思う。しかし現在はそのための機会・材料が少ないと思うので、今回の調査のデータを何らかの形で公開・成果発信していくと、分野内での議論に役に立つと思う。

(共創による課題設定型・プロジェクト型共同研究の推進について)

- 異なる大学に所属する者同士が共同研究を行う際に、大学ごとに予算執行手続きが違うので、その点での苦勞が多いと感じる。名古屋大学人文知共創センターでは、事務補佐員に業務を集約することでカバーしている。
- プロジェクトメンバーはそれぞれ研究のバックグラウンドが違うので、成果発表の場や形式が違う。共通のテーマで設定することができる国際学会を活用している。また、共同研究を行う際は、研究者がお互いの分野について一から学んでいく必要があるので、分野ごとの特性を理解する必要がある。
- 共同研究や異分野融合研究を行う際、学生も最初は面喰ったような状態になることもあるが、年次を経るにつれて、学際的な研究に対する理解が深まり、更に大学院生にもなると既に自分が持っている IT 系の技術を応用して自然と共同研究に参加するといった場合もある。
- 共同研究等の大きなプロジェクトを獲得すると事務処理が多くなったり、その経費で雇った研究者も下働きのような形になってしまったりするパターンもある。また、必ずしも共同研究の経験を活かせるような形で就職することができないなどといったこともある。
- 学術知共創の取組について、各分野での違いも考慮した上で取り組んでいく必要があり、そのような取組を経験した人材がサイエンスコミュニケーターのような人材になることができるのではないかと思う。また、自分の専門を極めたいと思ったときに、異分野融合研究を行うことにどんな意味があるのかといった観点もある。
- 共同研究のプロジェクトには自然科学系の研究者も多数参加しているが、どのようにプ

プロジェクトに自然科学系の研究者を巻き込んでいったのかという点については、過去に行っていたシンポジウムや研究会の伝手を活用して協力してくれる研究者を見つけ、一緒に定期的に研究発表を行っていく中で、お互いの研究成果の理解を進めていくことで共同研究の到着点が収斂していく手応えがあったと感じる。異分野融合研究を実施するには人脈が必要であると思う。

- 異分野融合研究でどのように研究成果を出しているのかといった点については、共著論文や書籍の中で、1つのテーマに対してそれぞれの研究者がそれぞれの専門分野の観点から論じることによって、論文や書籍そのものがある種の研究コミュニティーのようなものを形成している。その成果を足掛かりにして次のテーマへと進んでいくことが重要であると思う。
- 共同研究や異分野融合研究を実施するには、事務手続きのようなロジスティクスの共通性の確保や、研究者と研究者をつなぐような人材の育成・確保、大学内における研究推進体制（全学的な組織や学科内の組織）の整備といった、様々なインフラ的なものを強化していく必要がある。